特255
721

衆文庫
第十二篇

九州帝國大學教授 小出滿二 述

鄉土藝術

財團法人 社會教育協會

始

特255/721

鄉土藝術

九州帝國大學教授
小出滿二述

民衆文庫

第十二篇

財團法人
社會教育協會

目次

郷土藝術といふもの……一
郷土特有の色……四
異國を知つて味はふ價値……七
文化は郷土に卽す……一〇
歐洲各國の郷土藝術……一三
性情涵養と經濟上の價値……一六
地方の習慣……一八
名高い郷土藝術……二一
俗謠と農村の娯樂問題……二四
導く者の心得……二八

鄉土藝術

九州帝國大學教授　小出滿二

鄉土藝術といふもの

藝術の起源を問題としたら際限がない。

美を追求するのは人の本能であるから、ごく古いころから、人は一種の藝術を發表して居るが、本當の藝術といふものは、生活が出來、餘裕が出來たところに生れる。この意味に於て、農業が出來上つて始めて人類の生活は安定し、完成したので、そこに始めて本當の藝術は、生れ出たものと見るべきであらうと思ふ。

しかし、ごく古い時代にも藝術はあつたので、例へば石器時代のいろ〳〵な道具、及物の柄、彫刻、壁の繪などに、これを見出すことが出來る。彫刻の人の姿とか、その他骨や象牙などに彫られたものは、各地に澤山發見することが出來る。この種のうちで、殊にアルタミラの洞窟の野牛の繪は、非常に名高いものである。

織物も、初めは實用一方のものであつたに相違ない。が、そのうちに一色では滿足が出來なくなつて、いろ〳〵と模樣をつけるといふ風に進んで行つた。

鄕土に芽ぐむ藝術

かういふ風に考へるときは、未開人の間にも、藝術はあることはあつたのであるが、こゝで問題としたいのは、これら未開時代のものはしばらく措いて、とにかく人間が落ついて生活をしようとすれば、そこに鄕土といふものが出來る。

その鄕土に基いて、人々はいろ〳〵なことを工風して、種々の作品を作り上げる。

それらの作者は必ずしも農民とは限らぬが、とにかく農生活が根本であるから、いはゆる鄕土の中心は農業にあるともいへるので、そんな意味からこれらの藝術を、普通『農民藝術』と呼ぶ。これも至極結構な言葉ではあるが、私は後にもいふごとく、これを「鄕土藝術」と稱へたいと思ふ。

一口に鄕土藝術といつても、種類は非常に多い。元來それらの作品は、今日のいはゆる純美術といふのとは少し違つて、もと〳〵が實用的なものであり、それに美を要求するといふ人間本來の慾望から、美を付けて出來上つた藝術であるから、目的の多岐多樣であるのに伴れて、そこに生れた藝術の種類も、またいろ〳〵に分れて居る。

今日やかましい建築について見ても、その間取りから屋根、全體の形、位置、或は浴室とか家畜小屋ないしは屋敷の餘地の取り方といふ風に、數へ上げれば際限ないがとにかくそれらの具合が各地各樣で、いろ〳〵な特色を持つて居る。それを風土や氣候のためだと、一口にいつてしまへばそれまでだが、しかし私どもはそれ以外に、永

い民族的の習慣とか信仰とかいつたものが、その國々の或はその地方々々の家造りに伴つて居るのを見逃してはならぬ。それも、近ごろ出來る文化住宅がいろ〳〵の工風で建てられるのとは、自ら調子が違つて、地方に適した新らしいものが出來ると、それをまた近所でまねる。さうして永い間に工風發達したものであるから、そこに何ともいへぬ味がある。

鄕土特有の色

農家建築の研究は、近來わが國でも餘程問題になつて、それ〴〵專門に研究され出したのは喜ばしいことである。これにつけて注意すべきは、垣根の問題であらう。或る地方では、盛んに石を使用して居るところもあるが、まづ多くは生きた植物で垣を作つてゐる。それには扇骨木、杉、或は檜もある。それが一地方々々で自ら或るきまつたものを見ることが出來るので面白いと思ふ。

垣根とはいへぬが、例へば武藏野の村々では、家の周りに樫の木を植へたのがある。或はまた杉林を置いたのもある。自らなる武藏野の風情が、そこにまことに濃いものを發見せずには居られない。また所によつて、例へば島根縣の簸川郡あたりでは、家々の周りに松の木を植へ、また到るところに竹藪があるのを見る。かうした地方々々の家構へ、家の周圍の竹木のたゝずまひが、すべて、たゞ單に防風や收入の途ばかりの爲に、なされてゐるとは見られない。

農具について

住民の用ゐる道具について見る。

中でも農具は殊に重要なものゝ一つで、例へば鎌の柄だけに就いて見ても、各地で餘程違つて居る。殊に鍬は大變な違ひで、その大きさ、その重さ、角度など、まことに多種多樣である。柄だけでも、太いの細いの、長いの短いの、丸、楕圓、いろ〳〵

と違つて居る。かうした相違が土質に關係のあることは勿論であるが、その外に氣象にも關係がある。そして習慣といふ人事から、實は來て居るのも大いにあるので、たゞ天然自然といふことにのみ因らず、そこに人力が加はつて居るといふところに、藝術味を覺えさせられるのである。

これらの形狀の相違といふことも、經濟上の關係や、社會の進歩に伴れて、だんだん變つて行くことは無論である。殊に機械の發達から、近來は取わけて從來のものが、どんゞ廢つて行くが、これも止むを得ぬことではあるものゝ、一面からは非常に殘念なことである。だから昔から用ゐられて來たごく簡單なものは、殊に注意して保存して行くやうにする必要があると思ふ。

中でも殊に小農具は、材料が竹や木であるから、不必要になればつひ燒かれたりなどして、次第に無くなつてしまふ。歐洲などの博物館では、何百年か前の農具が保存されて居るのを見受るが、わが國でも今の內に餘程考へねば、後で殘念がつても及ば

ぬことがあらうと思ふ。

これと同時に、もう一つ考へねばならぬのは、かういふ風に心掛けるといふことは、たゞ單に古いものを保存するといふ目的からばかりでなくて、實際上も、新らしいもの必ずしも良いものばかりとは限らぬといふことである。近來はとかく宣傳に乘つて、その土地に必ずしも適當でない新農具が入つて行つて、古いものがずんゞ無くなつて行く傾向がある。實に殘念なことであるが、しかしいはゆる鄕土藝術として、これらのものをも、今更研究發展させることは、少し無理かと思ふ。

そこで、今現に問題とするのは、これから將來に發達させるものにある。その意味からいふと、鄕土の住民が美を愛し、美によつて生きて行くといふ心を、育み培ふのが第一で、これが私どもが鄕土藝術を高唱する所以なのである。

異國を知つて味はふ價値

『藝術に國境なし』とは、確かに認容しなければならぬことである。イタリヤの歌を聞くときに、その言葉の意味は知らないでも、可なりに感情を汲むことは出來る。フランスの繪畫に對しても、その形容は怪しみながら、確かに美しい線と色とを味はひ得られる。藝術の貴い價値は、その一つの點がこゝにあるので、古今東西を分つても、人として同じく相通ずるのであらう。

思ふに、幼稚なものは次第に發達し、誰もが最高のものを希望するのであるから、互に短を棄て長を採つて進めば、終には時代と地方により、異つて存在するものが統一せられ、世界人類のもつ藝術は、たゞ一つに歸着するかとも考へられる。

現代の文明は、ギリシヤからローマを經て、西歐に榮えて居るものが、唯一の本當のもので、印度や支那に昔盛んであつたものは、偉大ではあるがその最良分子は、つとに西歐文明に取入れられて、全體としては既に過去のものと認められて居るかのやうにも見える。若しそれが本當であるならば、われ等は競つて舊來のものを棄て、早

く新らしきに移らねばならぬわけで、もはや鄉土の藝術などを論議するには及ぶまい。

だが例へばシユブランガーなどが說くやうに、人類の文明は單一でないとすれば、甲が起り榮えて老いて亡び、これに代つて乙が現はれるといふことを拒むわけに行かぬ。かく甲、乙、丙……幾つか數ありとすれば、その間に、優劣といふよりも、甚だ異同のあることを認めねばならぬ。假に進化學者の敎へるところを適用すれば、より高く複雜に進んだものは、多くの中途にあるいろ〳〵の階程を過ぎたのであらう。その進んだ高いものを標準とし、且つそれを採用すべきことはいふまでもないが、その他のものは道程に過ぎないからといつて顧みぬのは間違つて居る。よし中途にあるものでも、異同を知つて味ふ丈けの價値はあるであらう。いはんや發達の道程は、必ずしも一すじではなくて、枝を分つて方向の異ることもあるべきはづで、中途といつて必ず經由したとばかりは限るまい。私が鄉土藝術を重んずるのは、この邊の心持から

來て居る。

これを平たく例へていへば、人間は魚や鳥や鼠や馬や猿を經て進化した胎内四十週の間に、各種の過程を完了したので、それ丈けに値もあることを充分に知らねばならぬ。けれども、人のみが現世に存在すべきで、魚も鳥も馬も要らぬものだとはいはれない。人は決して一度づゝ鳥となり鼠となり猿となつて來たのでもあるまい。魚は魚として、馬は馬として立派に存すべく、そのおの〳〵が異るところに値はあるといふものである。たゞ魚や鼠をのみ知つて、外に人あることを知らず、いつまでも魚や鼠で終るのは情ないことである。ミケランジエロやベートベンの藝術に對して、いはゆる鄕土藝術の關係は、丁度これと同じだと私は思つて居る。

文化は鄕土に卽す

人は地上に生れて棲息し、一歩も地球外に出ることは叶はず、悉く資材を地殼からもらつて生きて居る。そして地球は宇宙間では、粟粒といふにも足らぬものであるが、人から見れば無邊の大地と呼ぶべく、その山海の起伏、その風雨寒暑によつて、人類は全く支配されて居るのである。サハラ沙漠のやうなところでは、僅かにオアシスに密集し、ペルシヤやアラビヤや、後代ではアメリカのプレイリやサヴアナなど、草ばかりで家畜を飼ふに適して、その他には生活する途はないのもある。半歲以上を雪に閉ざゝれたラプランドでは、現にエスキモーが暮して居るやうな方法が、最良なのであらう。南洋やアマゾン河の流域などでは天與の產物で、食ふこと着ることに心配なく、今日まで裸のまゝで野蠻と呼ばれる生活を續けて居る。そして皆それ〳〵に、思想もあれば藝術も持つて居るのである。

左まで廣く見渡さないでも、古い歷史ではギリシヤといふ小國でも、アゼンスとスパルタでは著しい相違があつた。イギリスといふ島國でも、イングランドと同じ政治の下にありながら、ウエールスは全く異るものがあり、スコットランドやアイルラン

ドはいふまでもなく、マン島などが不思議な位に異つて居るが、實は、その特徴のあるのが當然なのである。

わが國でも武家封建の沿革はあるにしても、建國以來の同一家族でありながら、山川風土の影響は大に關係して、人文に甚だしい差異を來し、各地方の特異性と共通性が錯雜することになつた。だからその鄉土に行なはれて居るもの、及びそこから出て來るものに、同じく共通な點があると共に、一面には全く異なる特有性が現はれて居るのを見る。そして人は……その文化は鄉土を離れて存し得ず、鄉土に即するのでなければ、決して圓滿完全な發達は出來ぬのである。鄉土藝術を面白がるのはこれがためで、また重視せねばならぬのもこれがためである。近ごろやゝもすれば、大地を離れて生きようとするものがある。そんな考へでは鄉土も必要でないかも知れぬが、しかしこれは人類生活の本來から不可能なことである。

歐洲各國の鄉土藝術

大地に賴つて、土を耕すのは人類生活の根柢である。漁撈や狩獵によつても生存は出來るが、いつも落つかないで、自然に對する破壞を事とせねばならぬ。農によつて建設となり、始めて安定した生活が出來る。もとより文化は農耕によつてのみ進むものでなく、生活が安定して餘裕を利用し得るに至つて、始めて工風もあれば藝術も起るので、それから文化は生れ生活は向上する。

また一方に、人類は生れながらに孤獨なものではない。多かれ少かれ群居するもので、國語のムラにはムラガルといふ原義があるといふし、また西洋諸國の言葉にも、同じ意味を含むと聞く。「村」といふ漢字は、高燥で地產に富み、住むに適した所を指意するのださうである。卽ち一定の所に群居し、地から資料を貰つて生活するのが人生である。村に住む農人こそ、人類社會生活の基である。

農民藝術といひ農民文學と呼んで、素朴な原始藝術を愛好し、玩賞するのは甚だよいが、特に農民に限定するのは、今日の進んだ複雜な社會にとつて、いさゝか適切でないかと考へられる。現在農といふ仕事に卽するのでなく、むしろその環境――村に住む人に密接したもの、私はそれを「鄕土藝術」といひ、「鄕土文學」と呼ぶことにして居る。大地により、その風土に卽して共同生活をし、そこに特異性を帶び、その香と味を以て出づべきもの、それを鄕土の藝術といふのが適當で、決して農民と狹めるには及ばないであらう。

英語にペザント・アートの言葉も用ゐるが、ヴイレイヂ・インダストリーといふ場合に、たゞ「村」と呼んで、それを農耕者のみに限定しては居らぬ。ドイツではハンマートの語を愛用し、他國語には移し得ぬ特有の言葉だと誇つて居るが、それは正に鄕土に相當すべきものである。

「鄕土藝術」について、わが國でも近ごろ次第に說かれるやうになつたのは、誠に喜ばしい。西洋各國でもそれは夙に說かれて居るが、ドイツのゾーンライ氏は、殊に廣い範圍に亙つて行屈いた指導をして、內外に認められて居る。その他ミールケ氏なども、英國のデイッチフイールド氏などゝ相竝んで、その努力は敬服すべきものである。

アイルランドは、古來その歌謠、その舞踊、その傳說、その俗信と共に、レースや編物や刺繍などの手藝に聞えて居る。もはや二十年も前のことであつた。ダブリン市に開催の博覽會內に、家庭工藝部（ホーム、インダストリー）を設けて評判で、その時の報告書はそれ〳〵の研究家の手になつた有益な記事を以て充して居る。スキツランドの山村は、またよき鄕土藝術を持つ村として甚だ有名な一つで、殊に木彫は昔から知られて居る。近來遊客の手土產に多く出るやうになつて、品位を落したといふが、博物館などに特に保存されて居るのはいふまでもなく、今も村々の家ごとに、愛

掬にたへぬ品を見るのである。

性情涵養と經濟上の價値

ロシヤやハンガリーやスカンヂナビヤの諸國についても、殊に先年スチユヂオ誌の特別號が出て、廣く知られることになつた。ロシヤの組合で擧げ得た成功は、大に世の注意をひいたのであつた。いふまでもなく鄕土藝術は、趣味上から保存を切望するといふ外に、これを性情の涵養上から見て最もよしとされ、また經濟上にも少からぬ効果を擧げ得るものと認められる。それらについては、古來のものを保存することが第一、それを出來るならば持續することが第二、新に有望なものを敎へこみ、奬勵することが第三といふことになる。そして性情涵養といふことに力を注ぐべきは勿論で自家の需要を充すに止るのも頗る結構であるが、一面にまた經濟を考へねばならぬ場合に、單に技能方法を授けるだけでは足らぬ。必ずその製品の販賣を導き助けること

を併せて考へねばなるまいと思ふ。

そこでこれを奬勵するには、必ず產業組合と相俟つことを必要と考へられ、先づ有志を集合し、會團を組織し、適當な敎師のもとに敎練を受けしめ、組合の力によつて、作品の處理には毫も心配のないやうにする。會團は各地に自發的自治的に設けるやうに勵し促がし、なほ他の同種のものと聯合して中央會を組織し、互に連絡をとつて便宜を圖り合ひ助け合はねばならぬ。

指導の上の注意

鄕土藝術の製作を敎導するに當つて、最も注意せねばならぬのは、徒らに藝術家の惡風を感染せぬことである。素朴な村の青年男女であるから、生れながらの天才が、はからずも發見せられることもあらう。稀にでも卓越したものがあつたら、大にその天分を延ばして、純然たる藝術家に仕込むがよく、その者が村を去つても農を捨てゝ

も、それは客むべきではない。しかし、それほどの才能のないものが誤つて自負し、早くも一かどの藝術家を氣取るようになつたならば、到底今までの仕事に甘んずることは出來ず、その良からぬ影響は、たゞに自分一人に止らないで、家庭に及ぼし、一村近郷までも及ぼし恐ろしい害を撒き散らすだらう。

その者は、二三の相當に見るべき作は出來ようが、專門の藝術家として立つて行くことは出來ず、結局は下職などに勞れ果てるのが落であらう。元來が面白いことであるから、とかくに畑を打つよりも、家庭で雜巾掛けをするよりも、鑿を手にし、繪具に親しむ方が熱しやすい。熱心は賞すべきであるが、品評會などで餘程注意せねば、つひ村人達を天狗にならしめ易い。指導者の責任は、甚だ重大といはねばならぬ。

地方の習慣

郷土藝術の品物がどんな物かとか、或はその出來がどうかとかいふことは、問題ではないと思ふ。一例をいへば、小供が玩ぶいろ〳〵なおもちやに就いて見ても、近來は盛んにブリキやセルロイドの製品が流行して來た。これは一面には大きな進歩であるが、一面にはまた少し行き過ぎの感がある。例へばおはじきのやうなものでも、昔なら路傍から拾つて來た石だとか、或は豆なんかを使つて居たもので、そこにまた却つて面白味があつたのであるが、それがこの頃のやうに特製のガラス玉を用ゐるのでは、必ずしも喜ばれぬ。

また昔から農村でよく作る茄子に竹の棒を差した馬とか、茗荷で作つた鳥、笹の葉の舟といつたやうなものに、まことに面白い美的要素が含まれて居ると思ふ。郷土藝術を說くに當つても、そんなところを奬勵するので始めて味があるので、それを棄て〻却つて工場的のものを玩ぶのは、思はしからぬことである。

尤も田舍の習慣といふものは、容易には無くならぬものである。

私がいつも感ずるのは、地方民の服裝である。日本でまづ誰でも知つて居る有名な

のは、例の京都の大原女であるが、これは特別としても、地方々々であれに似た服裝が隨分ある。これらは決して棄てたものではない。

西洋でも、例へばベルリンではオーバーシユプレーから來た兒守女は、特別な服裝をして居る。エヂンバラに行くと、魚賣りの服裝に目をみはらされる。コペンハーゲンでは、野菜賣りの服裝が餘程かはつて居る。この外ドイツなどでは、地方々々の服をつとめて保存し、祭日にお寺へ行くときに、殊さらそれを着て行くといふ風である。從つてその方面の研究調査も、ずゐ分行とゞいて居る。日本では餘りかうした方面の話を聞かぬが、注意せねばならぬことゝ思ふ。

玩具は何でも手當り次第に、木、土、紙といふ風に、そこらにあるものを使つて作るのがよい。近年研究されて居るのも、單純に子供に與へるものといふ方に向つて居る。これにも跳ねるもの、音のするものなど、數限りなくある。

第二には記念的のもので、例へば節句の雛などもその一つであるが、近年は開校記念だとか、その他いろ〳〵の記念に作つて居る。これがなか〳〵その鄕土々々で味ふべきものがある。

名高い鄕土藝術

それから近年盛んに賞讃されて居るのは、信仰的なものである。信仰によつて古い昔ながらの形が、今なほその地〳〵に保存されて居るものは少くないので、これらはその形といひその色といひ、いかにも風雅で、いはゆる研究家の大人たちに珍重されて居る。

それらの一二に就いていふならば、北の方では彼の三春の子育馬、それから西へ行つて伏見の荷稻の狐、岡山の吉備津彦神社の土狗、九州では熊本の木の葉猿など、殊に有名なもので、珍重措かれぬものである。で、これらの中には、その因緣の明瞭なのもあり、またどうもはつきりと判らぬのもあるが、とにかくいづれもその地獨特の

味を持つて居り、いはゆる縁起や迷信に關聯のあるものである。

縁起や迷信に關聯があるものであるから、文明が進めば、それらはだん〳〵に亡びる運命にあるのであるが、信仰は別として、その朴訥な味を保存して行くことは、それでも恐くはまだ相當長い間出來ようかとも思はれる。しかし保存方面の努力は決しておろそかに出來まい。

犬張子などに就いて見ても、やはり地方々々でいろ〳〵の持味がある。その他極めて簡單なおもちやを取出して見ても、或は獨樂にしても、紙凧にしても、それから太鼓や笛のやうなものにしても、今はだん〳〵地方の特色が薄らいで行きつゝあるとはいへ、それでもその地〳〵の有合せの材料で造られたものには、いづれも特色があつて面白い。

木製の馬は弘前でも一戸でも、それから今いつた三春でも造つて居るが、それが皆それ〴〵に違つた形を保存して居るのを見る。天神祭に關聯した鷽も、ごく簡單な細

工ではあるが、何ともいへぬ味がある。これもやはり太宰府と東京とでは違つて居る。

名高いものでは、その外日向のうづら車、柳川の雉子車、熊本の比名久細工、王子權現の槍などがある。東京でも古いまゝで殘つて居るものに、駒込の富士山で出して居る麥稈細工の蛇がある。鬼子母神の薄の穗で作つた木兎も名高い。何のためかといふやうな理窟を言へば、全く何でもないが、その特色がいかにも面白い。

祭禮に伴ふものでは、長崎の潮ふき、宇和島の牛鬼、京都の矛など、皆それ〴〵小さな模型を作つて、それをおもちやに賣つて居るが、これがまた面白い味のあるものである。

人形に至つては、とても紙數に限りあるこの小著では述べ盡せない。北では仙臺の堤人形、西では奈良人形、京人形、日向の佐土原人形などは、誰知らぬものもないが、それからそれと數へ擧げて行つたら際限のない話である。

これらのものは皆昔からありしまゝの形で來て居り、將來にも愛玩用として恐らくは永くその姿を續けて行くものであらうし、非常に價値もあり、面白味もまた一段で一面經濟的價値からいつても、立派なものである。

カルタやその他の遊び道具も、賭博にまで墮落したのもあるが、これらの中にもまだ〳〵調査すべきものが多々あると思ふ。

俗謠と農村の娯樂問題

農民の勞働に伴つて、歌といふものが起る。ドイツのカール・ビッフアーの研究以來、これが大に注意されて居る。現にわが國にある俗謠、俚謠は、その大部分は勞働に伴つて生れたものであると思ふ。だがこれも世の中が進歩すれば、勞働するにも默つて働くといふ風になつて、俗謠或は俚謠そのものゝ本來の價値が無くなるかも知れない。しかし私は、今日研究すべきものゝ内で、これ程面白く、しかもこれ程大切なものは無いと思つて居る。日本青年館でも先年來この方に注意して、東京附近の餅搗まで實演する狀態で、この點まことに嬉しいことに思つて居る。

農村の娯樂問題も近ごろ盛んに說かれて居る。それには新らしいものを持つて來るのも決して惡くはないが、とかく遠方のものは、その地にそぐはぬといふ事があり勝である。それよりは昔からその土地に出來、その土地に發達したものを、何とかしていよ〳〵發展せしめたら、これに越した結構なことはないはづである。たゞ古いものには餘弊も伴つて居るから、その點を少し注意して、改めて行つたらいゝと思ふ。弊害が伴ふといふのを心配しては限りがない。

地方々々の各神社などに殘つて居る舞とか、一種の音樂なども、永く保存して行きたいものである。

要するに郷土藝術といふものは、素朴のうちに雅致を見出して喜ぶのであつて、文化の進んだ今日、なぜさういふことが望まれるのかといふに、それは餘りに機械を使ひ過ぎて、いはゆる進んだもの、精巧なものに馴れ切つて飽きたゝめであらうと思ふ。

例へば衣服の地にしても、始めは皆手織りものであつたのが、機械で目をそろへた細かいものになつた。そのときは、それがまことに喜ばれたのであるが、次第に馴れるに從つて、却つて鼻について、むしろ糸も太いのや細いの、目も不そろひの手織を珍重するといふことになつた。

食物について見ても、例へば芹などは、もと〳〵田の中に野生のものを利用したのであるが、これが進歩して軟化栽培によつて澤山作られることになると、成る程生育も立派だし、軟かな味も賞味出來るが、馴れるに從つて、どうも却つて野生の方が齒ごたへがあり、香も高くていゝといふことになる。これは人間の通性で、その現はれの一つが、近來郷土藝術といふ、むしろ進まぬものを喜ぶことゝなつたのであらう。

由來郷土藝術といふものは、充分發達せぬもので、これが土臺になつて、立派な音樂も、繪畫も、彫刻も出來上つて居る。その立派な音樂や繪畫や彫刻を喜ぶと同時に未完成な——それらの土臺である郷土藝術を喜ぶのは、何かしら矛盾したやうにも見えるが、實は人間の趣味はそこにある。

だから幼稚なものも、決して棄てゝはならぬ。またその幼稚なものが、すべて進んだものに併合されるといふわけでもあるまいと思ふ。たゞ考へねばならぬのは、始めから終まで幼稚な、まだ充分に進まぬ藝術のみを樂しんで、高尚な完成したものは一向味へぬのでは、まことに情ないことで、例へば酒は醉ふのが目的ではあるが、されば醉ひさへすれば何でもよしで、どぶろくばかりを喜んで、正宗の清酒は味へぬといふやうなのは、そのことが善とか惡とかはいへぬが、とにかく氣の毒な狀態だといへよう。郷土藝術を奬勵し發達せしめるのにも、この心得は忘れてはならぬと

思ふ。

藝術といふと、今までは風流がることをいひ、昔からの傳統的な形に墮して、或は氣取つたり、自分の獨りよがりであつたり、とかく他のものを俗人扱ひにして、雅致とは特別なものゝやうに考へた向もあつたのであるが、それは全く美の何ものたるかを知らぬもので、繪といへば床上の掛物以外には無く、中味よりは箱書や落款が有がたいのでは問題にならぬ。

導く者の心得

私どもの唱へる鄉土藝術とは、その土地にあるものを美化するのいひで、高尙な意味で美を愛し、美を好み、鄉土のものに美を見出すといふ修養を積ましめようとするのである。であるから、肥料を扱ひながらでも、そこに美を見、泥にまみれながらも、そこに風流を感ずるといふことが必要で、されば或人はかうした勞働に從ふ人々

自身から出たものでなければ、鄉土藝術でないとまで論ずるのであるが、私は前にも述べたごとく、それを必ずしも勞働者その人から出たもの、農民のみから生れたものと限定するのは、無理な注文だと思ふ。その仕事に從ひながら、一向味を知らぬといふこともあり得ることで、そこを天分の豊かな藝術家が美を見出し、形に現はして敎へる、蒙を啓いてやるといふことが大切なことではあるまいか。私はさういふ持論である。

敎へられて見れば、今までは苦しい、生活のためだから仕方がないと思つた勞役に、何ともいへぬ味を覺えて來る。鄉土藝術を說くに當つては、その心を養ふのが、根本の一番大切な問題であらねばならぬ。

前に述べたやうに、ロシヤなどでは、組合が組織されて、その組合から敎師を送つては敎へこむ。村人たちはその敎授を受けて、いろ〳〵細工物などをして、出來た品は組合に陳列し、販賣するといふ風である。わが國でも山本鼎氏等の計畫がかういふ

風で、まことに結構なことだと思つて居る。

最後に繰返していひたいのは、郷土藝術を說くものも導くものも、地方人をしてどうか下手な藝術家氣取りに陷らせぬやう、その郷土に生活しながら日常の生活を美的に味ふといふ、その心を養成するやうに心掛けて頂きたいといふことである。

なほ古來のいはゆる郷土藝術である歌謠とか舞踊なども、かうした氣持で研究して行きたいと思ふ。（終）

次號豫告

煙草の話　第十三篇　（三月五日發行）

專賣局煙草課長　涌井直次郎氏
專賣局技師　森澤博氏

民衆文庫

第一篇　今上陛下の御聖德　宮內省御用掛伯爵　二荒芳德氏
第二篇　紋章の話　文學博士　沼田頼輔氏
第三篇　肺結核は斯うすれば治る　醫學博士　額田豐氏
第四篇　公共劇（エント）の理論と實際　仲木貞一氏
第五篇　魚の生活　東京帝大講師　內田惠太郎氏
第六篇　通俗海洋學　水產講習所技師　淺野彥太郎氏
第七篇　氣象講話　理學博士　藤原咲平氏
第八篇　二百十日　文部省囑託　片岡重助氏
第九篇　米國女子青年團運動　陸軍省
第十篇　新兵器と化學戰　理學博士　藤原咲平氏
第十一篇　曆の知識　式部長官公爵　伊藤博邦氏
第十二篇　御大禮の話　九州帝大教授　小出滿二氏
郷土藝術

大日本聯合女子青年團機關

月刊

處女の友

◇讀物――中にも雜誌の選擇は男女老幼の別なく大切でありますが、わけても、感受性の特に鋭敏な女子青年にあつては一層大切であります。

◇「處女の友」は女子青年の眞の良友として、細心に注意して編輯されて居る雜誌で、月々面白くて有益な記事を滿載し、其月々の重要な時事的讀物を掲げて居ります。

◇「處女の友」は女子が結婚前におほえておかねばならぬ衣食住、育兒衛生、家計、手藝等の實用記事を集載し、趣味と實益を兼ねた一種の家事教科書であります。

誌代 一冊二十一錢（送料共）半年一圓二十錢 一ヶ年二圓三十錢
團體割引 十冊（一冊十九錢）三十冊（一冊十八錢）送料共

東京市小石川區白山御殿町

財團法人 社會教育協會

振替東京二一八三番

昭和三年二月二日印刷
昭和三年二月五日發行

民衆文庫第十二篇
定價（送料共）十二錢

著者 小出滿二

編輯兼發行者 財團法人社會教育協會代表者 小松謙助
東京市小石川區白山御殿町百廿七番地

印刷者 下川隆博
東京市神田區淡路町七番地

平凡社印刷所

郷土藝術
不許複製

發行所 財團法人 社會教育協會
東京市小石川區白山御殿町一二七
電話小石川七五〇九
振替口座東京二一八三

317
172

事業

パンフレットと雜誌
一、社會教育パンフレット（月二回）
二、民衆文庫（月一回）
三、月刊雜誌處女の友（一日發行）

講演會及び展覽會
一、講演會談話會の開催
二、講習會の開催
三、講演會及び展覽會の斡旋

映畫圖書館
一、優良映畫の撰擇推奬
二、フイルムの貸付
三、出張映寫
四、機械及附屬品の取次

社會教育の研究調査
一、內外社會教育施設の調査
二、民衆娯樂の調査研究
三、青少年の讀物調査及び選定

役員

會長 法學博士 男爵 阪谷芳郎
理事長 東大教授 法學博士 穗積重遠
常務理事 小松謙助
同 文部省社會教育課長 小尾範治
理事
同 文部省普通學務局長 武部欽一
同 文部省實業學務局長 白上佑吉
同 內務省 社會局部長 守屋榮夫
同 中央氣象臺理學博士 藤原咲平
同 東大教授 農學博士 那須皓
同 東京日日新聞取締役 城戸元亮
同 東京朝日 編輯局長 緒方竹虎
同 宮內省御用掛 伯爵 二荒芳德
同 衆議院議員 牧野良三
同 衆議院議員 山桝儀重
同 日清製粉會社 社長 正田貞一郎
同 三井信託會社 專務 米山梅吉
同 三菱商事常務取締役 山岸慶之助
同 關屋龍吉
監事 第一銀行取締役支配人 明石照男
同 法學博士 岩田宙造

終